

## Dress : the journal of the Costume Society of America (ドレス)

New York : Costume Society of America , 1975—

1973年に設立されたコスチューム・ソサエティ・オブ・アメリカ(略称CSA)の学会誌として、「ドレス」は1975年から毎年刊行されており、2004年には31号に達している(1990年のみ2冊発行)。イギリスで1965年に誕生したコスチューム・ソサエティが、服装の歴史の古さを反映するように学会誌のタイトルを「コスチューム」にしているのに対して、タイトルを「ドレス」としたアメリカの学会誌の特徴は、開拓時代から後のアメリカの服装が主として取り上げられているところにある。CSAの会員は地区別に分かれて分科会を持ち、ドレス研究への関心を高める活動を行なっている。学会誌の発行当初は事務局がメトロポリタン美術館のコスチューム・インスティテュートに置かれており、当時キュレーターだったステラ・ブラム(Stella Blum)が担当者だったようである。1985年に逝去したブラムの名をつけた研究奨励賞が設けられており、賞を獲得した論文が「ドレス」に掲載されてきている。創立以来のメンバーなどの詳細は25周年を記念した25号(1998年)にある。投稿者はキュレーターを中心にコレクターや教師やフリーの学者、舞台衣装家やデザイナーや好事家まで幅広いが、時代と共に大学教師や研究者の投稿がしだいに増えてきている。ブラム賞の論文が20号から適宜掲載されるようになってから、ドレス研究の姿勢が学究的になってきたように思われる。テキスタイルや服装研究をカリキュラムにもつ大学が増えてきたことも影響していると考えられる。30号の受賞論文「フロイト・フラッパー・ボヘミアン」(Deborah Saville)は1910年代のグリニッジビレッジの女性たちに焦点をあてたユニークな論文で珍しいビジュアル資料をそろえている。やはりアメリカ独特の現象を取り上げたものが参考になる。29号(2002年)の「アメリカの肖像から服装を読む」という特集も面白い試みをしており、アメリカ独自の服装研究が進んできていることが伝わってくる。先住民やアフリカ系アメリカンなどアメリカに特有のカルチャーに関連する服装研究も盛んになることを期待したい。

イギリスの「コスチューム」誌では中世から近代まで幅広い時代が研究対象になっていて古文書や日記・書簡などの史料が豊富に出てくるが、歴史の浅いアメリカでは私たちには比較的身近に感じられる論文テーマが多い。したがって「ドレス」には授業のテキストに応用できる論文を見つけやすい。たとえば「ブルマーズ(Bloomers)」(6号 1980年)では、婦人運動家アメリア・ブルマーが推奨したブルマーズ(ルーズなパンツ)が、アメリカ国内では実用的なドレスとして農婦や旅行者や療養者そして学校の体操服として使用されていたことを証拠立てるビジュアル資料が提示されている。イギリスでは痛烈に批判されたブルマーズだが、アメリカではアメリカン・ドレスと呼んで愛用する女性たちがいたことも写真資料の発掘によって確認されてきており、開拓時代のアメリカのコミュニティーではパンツをはく女性の姿は珍しくはなかったことが明らかになっている。

女子水泳競技の水着とオリンピックに関する論文(24号 1997年)もテキストに使用したことがある。観戦者の前で肌を露出する水泳競技が女子には閉ざされていた時代の苦闘と、それに対する世論をまとめたものである。また話題になった論文に、女性の服の打合せを取り上げたものがある

(20号1993年)。ファッション画やコレクション衣装を資料にして、いつから女性のドレスにボタン留めが使われ、打合せが右上になったのかを考察した労作だが、なぜ右上なのかを解き明かすにはいたらなかった。いまだに解けない難問である。

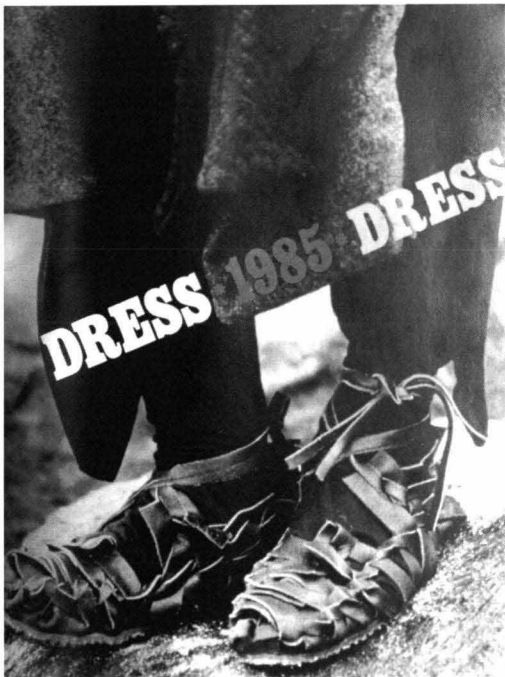
これまでに最も注目されたエッセーといえば、ハロルド・コーダ (Harold Koda) の「レイ・カワクボと貧困の美学」(11号 1985年)であろう。コーダは、1983年4月号の「ヴォーグ」誌に掲載されたコム・デ・ギャルソンの写真記事に対して送られてきた2通の投書(同年6月号に掲載)を紹介することからエッセーを書きはじめている。

「最新のトレンド情報を伝えて読者を惹きつけようとするのは分かるが、破れたパッチワークのTシャツのシュラウド(死体を包む布)に読者が230ドル払うと本当に思っているのですか」

「キャプションの誇大宣伝が一層高く(低く)なった。これを書いたとき、あなた方は笑っていたのではないですか。どれくらい真面目なのですか？」

不快感を隠さない投書と冷笑気味の投書が載った「ヴォーグ」6月号にも、再び問題のコム・デ・ギャルソンの新しいドレスとシューズの記事が取り上げられていた。なんと「ドレス」11号の表紙にはその写真が使われた。コーダは日本のワビ・サビの美を説いてコム・デ・ギャルソンの作品を貧困の美学(aesthetic of poverty)と解釈し、この言葉がマスメディアに広がっていった。1980年代のレイ・カワクボが巻き起こした衝撃を伝えるエッセーである。学会年報「ドレス」としても意表をついた表紙だったことはいままでもない。

なお、CSAでは、学会員でもあった故リチャード・マーチン氏(メトロポリタン美術館コスチューム・インスティテュート)の功績を称えて2002年よりアメリカ国内の優れたコスチューム・エキジビションを表彰するリチャード・マーチン賞を設けている。マーチンの画期的な発想と企画が服装研究に与えた影響を高く評価し、彼の業績を受け継いでさらにエキジビションを活気づけていこうという意図から設置されたものである。(辻 ますみ)



11号(1985年)の表紙